

おはなし

【 うこんさん、うこんさん! 】 (3)

- 「うこんさん、うこんさん! まず、高槻のお殿さまだった頃のお話を聞かせてください。
毎朝早く、教会で、お祈りをされていたんですよ。」

そうですね。毎朝早く、目を覚ましたら一番に、高槻城の敷地の中にあった教会・高槻教会に出かけて行って、朝のお祈りをしていました。

お祈りのことを「オラショ」と言っていたんですが、神さま・デウスさまに、オラショをおさげしていました。

一日の始まりは、教会での朝の祈り・オラショからスタートするようにしていました。

このことは、私が高槻にいる間は、ずう〜と、かかすことなく、そのようにしていましたよ。
雨が降っていても・雪が降っていても・寒い寒い朝であっても、反対に、暑い暑い日の朝であっても、関係ありませんでした。

日曜日・主日・主の日であっても、祝日・お祝いの日であっても、その他の平日であっても、同じようにしていました。

毎朝、高槻教会に、最初にやって来るのは、誰だったと思いますか？

ダリオ飛騨守・お父さんか、私か ―― そのどちらかであるように、していました。

私が、高槻城主になりましたのは、天正元年（1573 年）のことですが、その次の年、天正 2 年（1574 年）に、高槻城内に、みんなで教会堂を新しく建てたんですよ。

その教会堂に、毎朝、多くのキリシタンの皆さんが集まって来て、一緒に、デウスさまに、お祈り・オラショをおさげしました。

教会堂の床の上に、みんなで ひざまずいて、しっかり声を出して、「パーテル ノステル・主の祈り」や「天使祝詞・アベマリヤの祈り」などを祈っていききましたよ。

- 「うこんさん、うこんさん! 【パーテル ノステル・主の祈り】って、どんな祈りなんですか。」

このお祈り・オラショはネ。主イエス・キリストさまが、「このように祈りなさい」—— と言って、教えてくださった お祈りなんですよ。

今、クリスチャンの皆さんが祈っておられる「主^{しゅ}禱^{とう}文・主の祈り」は、現代の言葉で祈る祈りですが、400 年前の、その当時の言葉のままで、みんなでいっしょに、祈ってみることにしましょうか。

400 年前のキリシタンになったつもりで、いっしょに、心を合わせて、祈りましょう。

パアテル・ノステル 主の祈り

天にまします われらが御^{おん}おや
御^み名^なを たっとまれたまへ
御^み代^よ 来たりたまへ
天において おぼしめすまま なるごとく
地においても あらせたまへ
われらが 日々^{にちにち}の 御^{おん}やしないを
今日^{こんにち} われらに与えたまへ
われら 人にゆるし申すごとく
われらが とがを ゆるしたまへ
われらを テンタサンに
はなし玉^{たま}ふ事 なかれ
われらを 凶^{きょう}悪^{あく}より のがしたまへ
アーメン

「テンタサン」というのは、「誘惑^{ゆうわく}」という意味ですよ。

英語で言うと、「テンプテーション・temptation」だよネ。

「われらを、テンタサン・誘惑に、はなし玉ふ事なかれ。」

400 年前の、私たち・キリシタン達は、「主の祈り」を、このように祈っていたんですよ。

●「うこんさん、うこんさん！ どうして、そんなに、毎朝早くから 教会で、お祈りされるんですか。」

それはね。イエスさまが、そうするように教えてくださったからなんだよ。

デウスさまのことを、まず一番にしなさい。

何でも、大切なことはすべて、自分の力だけで、やっているんじゃないんだよ。

デウスさまを、いちばん大切にして、デウスさまに祈って、デウスさまから 力や知恵をいただいて、やっていきなさい。

そうしたら、デウス様から愛されて・祝福されて、その日その日を過ごしていくことが出来るんだよ —— って、イエスさまが 教えてくださったんだよ。

●「うこんさん、うこんさん！ 高槻のお城って、どんなお城だったんですか。」

私が、高槻城の城主になる前に、み～んな焼けてしまっ^{いち}てねえ。また一から、造っていったんだよ。

みんなが、よ～く、力を合わせてくれて、お堀も、それまでのものよりも、りっぱなものになりましたよ。

^{はば}幅は 24m。小学校のプールぐらいの幅だったと思うてくれると、わかりやすいかな。

深さは 8m ほどありましたから、これは、みんなの学校のプールよりも、ずっと深いよネ。

^{てんしゅかく}天守閣は、3階だてでした。でも、そこに住んでいたわけじゃあ、ないよ。すぐそばの、「二の丸」と言っていた所にあった おうちに住んでいたんだよ。

東と北と南に、お城^{はい}に入れる門を造ったよ。

^{おおてもん}東大手門・北大手門・南大手門 と言って、この3つの門からしか、お城には入れません。

その他の所は、^{ほか}24m の幅のお堀になっているから、お城の中に入ってくることは出来ないよネ。

教会も、みんな建てていったことは、先ほど お話したよネ。

デウス様を愛し、デウス様に愛されて、イエスさまのように、人々を愛し、愛し合って、お互いに愛し合う・ご大切にし合う、そのような高槻の町になってほしい、と思って、祈りながら、やってきたんだよ。

●「うこんさん、うこんさん！ 高槻の町では、たくさんの人たちが、キリシタンになっていっ

たんですよネ。」

そうなんだよ。デウス様、イエスさまに感謝しているんだよ。

私たちは、毎日、デウス様に お祈りをささげ、そして、イエスさまに教えていただいた通り、一人一人、どの人も、大切に考えて、愛し合うように・大切にするように ということをしてきたのですが、神さま・デウス様は、そうしたことに答えてくださって、私たちを、そして、高槻の町を 祝福してくださいました。

毎年毎年、人々は イエス・キリストを、救い主^{ぬし}と信じて、洗礼を受けていきました。

今年は、4千人。次の年は 6千人。又、その次の年は 4千人 —— という風に増えていって、天正9年（1581年）には、私が治めていた場所に住んでいた人たち・領民の人口が2万5千人でしたが、その内の1万8千人が、キリシタンになっていきましたよ。

パーセントで言うと、72% になります。10人のうち、7人以上の人がキリシタンだったんだよ。

すべて、聖霊なるデウス様・スピリツタントであるデウス様のお働きです。

デウス様が救ってくださり、終わりのない いのち・永遠のいのちを与えてくださったんだよ。

私たちは、祈りながら、聖書の教えの通り・デウス様の教え通りにするように、してきただけでしたよ。

デウス様が、いっしょにいてくださって、私たちを祝福し、私たちの町を祝福してくださったのです。

●「うこんさん、うこんさん！ 【本能寺の変】で、織田信長さんを、明智光秀^{たかひで}さんが、倒してしまいましたが、右近さんは、どう思われますか。」

あの時は、本当に、びっくり仰天^{ぎょうてん}してしまいました。言葉では、うまく言えないほどです。

明智光秀さんのことは、日頃から、りっぱなお方だと思っていましたので、信じられないことでした。

光秀さんにも、いろいろ、わけがあったんでしょうけれど、あのようなことは、私には、キリシタンとして、とても、認め^{みと}めることは出来ません。

信長さんのことで言いますと、今、乱れて、戦いの続いている日本の国を、一つにまとめてくださる方ではないかと思っていましたので、本当に残念です。

光秀さんとは、山崎という所で、戦うことになってしまいましたが、本当に、惜しいお方をなくしてしまうことになってしまいました。

●「うこんさん、うこんさん！ 明智光秀さんのほかに、**荒木村重**さんも、信長さんに従いませんでしたよネ。」

光秀さんの4年前のことでしたよ。あの時は、もっともっと、大変でした。

私たち、高槻は、^{むらしげ}村重さんが、信長様から責任を与えられていた ^{せつづ}摂津の国にあったんですから。

私は、村重さんに、「信長さんに逆らうつもりなど ない」という、本当の気持ちを、いのちがけで訴えるようにと、**妹や 息子の十次郎**^{ひとじち}を人質に差し出すことまでして、必死で訴えました。

村重さんも、一度は、わかってくださったのですが、最後には、そのようには、なさいませんでした。

信長さんのもとにあって、「^{こくしゅ}摂津国主」という、大事なことをまかされて、従っておられたのに、信長さんを敵にして戦う、と言われる村重さんは、正しくない —— と、私は思いました。

でも、どうしたら いいのでしょうか？

あの、信仰深かった 父の^{ひだのかみ}飛騨守までが、人質に差し出している自分の娘や孫、かわいさに、信仰から はずれてしまいました。

この私が、村重さんに従わなかったら、切腹する！ 神父さまを はりつけにする！ —— などといった、とんでもないことを言い出して、私をますます、苦しめました。

信長さんも、神父さまや キリシタン達を、「皆殺しにする！」と、おどしをかけてこられました。

本当に、本当に、いったい、どうしたら いいのでしょうか！

この時ほど、必死に、真剣に、祈り続けたことは、それまで ありませんでした。

「デウス様、イエスさま。この大切な時、むずかしい問題について、どのようにしていけば いいのでしょうか。

イエスさまなら、どのようにされますか。

聖書の教えでは、どのようになっていますか。

神父さまの教えを、あれこれ、思いめぐらせていますが、どうすればいいのか、答えを見つけることが出来ません！」

私は、食べることも、飲むことも忘れて、必死に 祈り続けました。

そして、ついに、デウス様は、私の必死の祈りに、一つの答えを与えてくださいました。

それは、『信長さま・村重さまの どちらにつくのか』ということではなくて、高槻の城を去って、すべてをデウス様にささげて、これからは、デウス様や教会に仕えていく・献身する、ということだったのです。

この答えをもって、私は、そのように決意した^{あかし}証として、髪の毛をそり、紙のきもの・紙子という、紙で出来た着物に着がえて、信長さまのおられた茨木の、^{こうり}郡山城に出かけて行ったのでした。

しかし、信長さまは、私の思い通りには、させてくださらなくて、それからは、キリスト教を大切にしてくださった信長さまに、仕えていくことになりましたが、それも、デウス様のおこころかもしれない、と思いましたよ。

人質として差し出していた、妹や、わが子・十次郎は 無事でしたし、信長さまを相手にして戦った 父・飛騨守のいのちも、信長さまは、特別に ゆるしてくださいましたよ。

すべてのことを、デウス様・イエスさまに、心から、感謝しました。

- 「**うこんさん、うこんさん！** 今度は、家族のことについて、お話を聞かせて！
妻の ジュスタさんのことを、話してください。」

妻の ジュスタはネ。私の、大切な、大切な宝物。デウス様から いただいた、プレゼントなんだよ。

デウス様が、「^{とお}十のマンダメントス」・「十戒」と言われているよネ。十のマンダメントス・十戒で教えておられるように、何人もの女の人を妻にしたり、そばに置いていたりしては いけないんだよ。

一人の女の人だけを 妻として、大切に大切に愛して、互いに助け合っていくんだよ。

●「^ううこんさん、^ううこんさん！ たしか、右近どのも、妻のジュスタさんも、^{ごきょう}生まれ故郷は、同じ、大阪府の^{とよのちやう}豊能町なんですよネ。」

そうなんだよ。私は、子どもの頃の名前は「彦五郎」といいましたが、豊能町の高山という所で生まれて、今で言うなら、幼稚園の頃まで、高山で育ちました。

妻のジュスタの方は、高山のおとなりの、余野という所で、生まれ育って、私と結婚するまでは、余野ですごしました。

ジュスタのお父さんと、私の父・高山飛騨守は、大の友人でした。^{しんせき}親戚にあたる人でした。

私たちは、「^{どの}クロ殿」とか、「クロン殿」とお呼びしていましたよ。

1563 年に、キリシタンの信仰をもって間もない・信仰に燃えていた私の父・高山ダリオ飛騨守は、自分が城主だった、奈良県の沢城や、故郷の高山などにいる 家族や親戚の人たち、そして、自分の部下だった兵士たちのために、^{ろれんそ}ロレンソ修道士さまに来ていただいて、キリシタンの信仰を伝えていったのです。

私たち 家族は、この時は、奈良県・^{やまと}大和の沢城にいたんですけど、お父さんのダリオ飛騨守は、大阪府・豊能の余野にいた、大の友人・親戚でもあった ^{クロ殿}クロ殿の所に、手紙を書いて、^{ろれんそ}ロレンソ修道士さまに 出かけて行ってもらって、キリスト教の信仰を伝えてもらいましたよ。

^{クロ殿}クロ殿にあてた手紙 は、こんな手紙でしたよ。

「私が、あなたに、心から おすすめしたいと思いますのは、このことです。

^ぜ是が^ひ非でも、何としてでも、^{なん}デウス様のことをお聞きになって、キリシタンになられるように、^{すす}お勧めします。

私は、あなたに、この、キリシタンの教え以外には、どのような、ほかの教えも・救いの道もない —— ということは、^{ぜったい}絶対、確実なことだと —— 私が^{ほしょう}保証します。」

こんな手紙だったんですよ。

- 「うこんさん、うこんさん！ お父さんの手紙、自信^{まんまん}満々の、すご〜い手紙ですネ。」

そうだよネ。父らしい手紙だと思います。

ロレンソ修道士さまは、40 日の間、余野にいてくださって、キリスト教を、ていねいに伝えていかれました。

その結果、クロ殿、そして奥様と子ども達、クロ殿のきょうだい、クロ殿のお父さん、そしてクロ殿におつかえしていた家臣たちが、デウス様・イエスさまを信じて、洗礼を受けていきました。

この時、クロ殿の長女だった、幼いジュスタも信じて、洗礼を受けていったわけです。「ジュスタ」というのは、この時、ロレンソ様から洗礼^{さす}を受けていただいた時に、いただいた名前・キリシタン ネームになります。

- 「うこんさん、うこんさん！ ジュスタという名前は、何か、意味があるのですか。」

実は、私も、ロレンソ様から 洗礼を受けていただいて、その時、つけていただいたキリシタン ネームは、「ジュ・ス・ト」というんですよ。

私の名前は「ジュスト」、妻の名前は「ジュスタ」。似ているでしょう？

どちらも、「義^{ぎじん}人」という意味の言葉なんですけれど、私たちは、罪によごれきった罪人^{つみびと}だったんだけど、イエスさまを、救い主として信じて、罪をゆるされて、神さまによって、義と認められた人・ただしいと認められた人 —— という意味なんだよ。

すばらしい「名前」を つけていただきました。

ちょっと むずかしい話になるんだけど、実は、「ジュスト」も「ジュスタ」も、ポルトガルという国の言葉です。

日本の国に、キリスト教を伝えてくださった 宣教師の皆さんの、多くの方々が、ポルトガル人だったのです。

ポルトガル語には、日本語と違ってネ、男ことば と 女ことば の区別があるんですよ。

「Justo」のように、J・U・S・T・O、最後が O で終わる 男ことば。

「Justa」のように、J・U・S・T・A、最後が A で終わる 女ことば。

Justo・Justa どちらも同じ意味の言葉で、「義人」・神さまの前に、ただしいと認めていただいた人 —— という意味になりますよ。

●「うこんさん、うこんさん！ 洗礼を受けたあと、ジュスタさんは、どうされたんですか。」

そうだよネ。ジュスタは、まだ私と結婚したわけではないので、私の妻ではありません。

実はネ。ジュスタは、洗礼を受けたあと、なかなか、大変だったのです。

洗礼を受けた^{あと}後、しばらくして、お父さんが病氣になって、亡くなってしまわれます。天に召されていられました。ジュスタは、お父さんをなくしてしまったんです。

お母さんのマリアさんは、お父さんのきょうだいの人と結婚されました。再婚されました。

そして、キリシタンとしての信仰からは、だんだん^{はな}離れていってしまわれました。

私の父・ダリオ^{ひだのかみ}飛騨守は、大の友人だった クロ殿が 天に召されていったあとの、娘のジュスタのことを心配いたしました。

私が高槻城主となった年の^あ明くる年・1574 年に、父・飛騨守から、「余野のジュスタさんを どう思うか」という話があって、私たち二人を、結婚へと導いてくれたのです。

私は 22 歳。ジュスタは 9 つ年下の 13 歳。

そのあとは、二人で協力して、祈りと、ご大切の心・愛の心を大切にしながら、やってきました。

キリシタンの信仰から離れていた、お母さんのマリアさんや、新しい家族のみんなも、高槻に住むように お迎えして、又、信仰に立ち返っていただきました。

妻のジュスタは、その後も、大変なことがいっぱいあった中で、私といっしょに、いつも祈りながら、よくやってきてくれたと 感謝しています。

高槻から 明石へ。明石にいた時に、秀吉様によって、「**バテレン追放令**」という、キリスト教を禁止する命令が出されました。

私は、たとえ、関白・秀吉様の命令であっても、力づくで、信仰を捨てさせるのは、正しくない ―― と思っていましたので、私の、デウス様・イエスさまに対する信仰には、変わりはありませんでした。

しかし、秀吉様の命令に従わない ということは、すべてのものを失ってしまう、ということでもあります。

私たちの持っていたものはすべて、名誉も、地位も、財産も、仕えてくれていた家来の人たちもすべて、信仰以外のものは すべて、なくなってしまいました。

妻のジュスタや、長男の十次郎や 子ども達にとっても、大変な経験でした。

その後、小西行長さんに助けていただいて、^{しょうどしま}小豆島に2年ほど、かくれ住みました。

更にその後は、秀吉様のおゆるしも出て、前田利家さんや 利長さんに助けていただいて、金沢で26年間、すごしました。

最後は、徳川家康様によって、私たちが キリスト教の信仰を捨てないということで、私たち夫婦・娘のルチア・少し前に天に召されていった 長男・ジョアン十次郎の5人の子ども達（私たちの孫たちですよネ）といっしょに、フィリピンのマニラ にまで、追放されていきました。

最後の最後まで、私たち夫婦は、ずっといっしょでした。

妻のジュスタは、私の、大切な大切な宝物。デウス様からいただいた、最高のプレゼント なんですよ。

●「**うこんさん、うこんさん！** お父さんの **飛騨守さん**は、どんな人なんですか。」

ん〜。^{いっぽんぎ}一本気と言えればわかるかな？ 曲がったことが大キライで、ま〜っすぐな性格の父でしたよ。

そんな父が、まず、キリシタンの信仰を持ちましたよ。

それまでは、^{なむみょうほうれんげきょう}「南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經」などと、お経を唱えて、熱心に仏教を信じていたんですけれど、ある時、えらい お二人の先生方と、「キリスト教を やっつけてやる！」と

言って、奈良に出かけて行ったのに、ロレンソさんのお話を聞いて、「これだ！」と思って、キリシタンになって、**ヴィレラ** という神父様から、洗礼を受けたのです。「ダリオ」という名前をつけていただきました。

そのあとすぐ、沢のお城にも、ロレンソさんに来ていただいて、私たちに お話を聞く時を作ってくれました。

この時、ロレンソさんが話してくださった デウス様やキリスト様のお話を聞いて、私も、天地を造られたのは、このお方だ！ このお方が、私を愛してくださっている、ということが、よくわかって、デウス様を信じて、キリシタンになり、ロレンソさんから、洗礼をうけました。

12 歳の時でした。

私は、「ジュスト」という名前を、いただきました。

今の私があるのは、すべて、このような父のおかげです。

すてきな父だ！ すばらしい父だ！ と感謝していますし、尊敬しています。

●「**うこんさん、うこんさん！** むすこの、**十次郎さん**は、イケメンだったんですか。」

私の口からは、何とも言いにくいことですが、皆さん、そのように言ってくださっていましたよ。

私たちが 26 年間、お世話になった、加賀の国。今の、石川県ですよネ。加賀の国で、私たち親子のことを歌った歌が はやって、うたわれていたんですよ。

こんな歌です。

♪ 能を見ようなら 高山みなみのぼう
おもてかけずの 十次郎を

—— という歌なんですけどネ。

♪ 高山みなみのぼう —— 南坊 というのは、私のことですよ。

「^{のう}能」というのは、お面をかぶってする、踊りのような劇なんだけど、私たち親子のことを、ほめてくれているんだよ。

「能の舞台を見ようと思ったら、高山右近さん・南坊さんと、息子の十次郎さん親子の能が最高！

特に、息子の十次郎さんは、お面をつけない、そのままの十次郎さんが、ステキ！」

と、うたっているんだよね。

♪ 能を見ようなら 高山みなみのぼう

おもてかけずの 十次郎を

おもてかけずの 十次郎を

自分の子どものことが ほめられるのは、父親として、うれしいことですよ。

十次郎は、私たち夫婦の、自慢の子どもです！

十次郎も、キリシタンで、洗礼を受けて、「**ジョアン**」という名前をいただいていた。

5人の子どものパパでしたが、30歳をすぎて、若くして、亡くなってしまいました。天に召されていきました。

残念でしたが、私たちが マニラに追放されていった時には、ジョアン十次郎の5人の子ども達も いっしょでしたよ。

●「**うこんさん、うこんさん！** 十次郎さんは、イケメンだったようですが、右近さんは、本当は、**どんな顔**をされていたんですか。」

本当は、ですか？

たくさんの方が、私のことを、絵にかいたり、彫刻にしてくださいっていて、どれも、よく出来ていて、ありがたいことだと思っています。

でも、私が生きていた頃のお方が、私を見たり・私を覚えていたりして 仕上げてくださった絵や彫刻は、一つもありません。

でも、このことには 理由があるのです。

皆さんが、織田信長様や豊臣秀吉様、徳川家康様などの 姿・かっこうを、絵や彫刻で知っておられるわけですが、そうした絵や彫刻が、どこにあるのか、考えてみてください。

それらをお持ちなのは、お寺や神社などです。

信長様の絵も、秀吉様の彫刻も・・・ どれ一つとってみても、ただ飾っておくために造られたものではありません。

拝むため・礼拝するために造られているものです。

今でも・現代でも そうではありませんか。

人々は、お寺や神社に出かけて行って、そうした絵や彫刻に 手を合わせて、拝んでいるのです。

私たちが信じている デウス様・キリストさまは、人を、神さまであるかのように思って、拝んではいけません。人が描^{えが}いたり、造ったりしたものを 拝んではいけません。

—— と おっしゃっています。

聖書では、そうしたものを、「偶像^{ぐうぞう}」と言っているのですが、信長様を、秀吉様を、家康様を、神だと思って 拝んではいけません。偶像を礼拝してはいけません。

天地万物を創造なさった、デウス様・神さまだけを拝みなさい。礼拝しなさい。

—— そのように おっしゃっていますし、私たちも、そのようにしているのです。

というわけですから、400 年前の、当時の人たちが、私のことを絵にかいたり、彫刻にしたものは、一つもありません。

というわけで、私の本当の顔かたちや 姿かっこうは、残念ながら、皆さん方^{がた}には、わかりません。

でも、それでいいのかも しれませんよ。

その方が、いいのかも しれませんよ。

考えてみれば、私たちの、イエス・キリスト様の顔かたち・姿かっこうも、本当のことは、何もわかりませんよネ。

私たちが、イエス・キリスト様と聞いて、浮かんでくる姿かっこうは、有名な画家たち・彫刻家たちが、多分、こうだったのではないかなあ、と考えたものですよネ。

本当のところは、わかりませんから、いろんな人たちが、真剣に考えて・考えて、すばらしい作品にされています。

私のことも、皆さん それぞれが、自由に、思い描^{えが}いてくださって、皆さんの、高山右近像に仕上げていってくださると、うれしいです。よろしくお願いします。

- 「うこんさん、うこんさん！ そろそろ、終わりに近づいてきましたよ。

右近さんが、最後にすごされた マニラって、どんな町なんですか？」

日本の国を、追われてきた私たちを、キリスト様の愛・キリスト様の ご大切の心をもって、あたたかく迎えてくださったのが、マニラの町の人たちだったんですよ。

フィリピンフィリピンの国の、ルソンという島にある町です。

「イントラムロス」といって、じょうへき城壁で囲まれた所に案内していただいて、だいかんげい大歓迎してくださいましたよ。

キリスト教を信じている、ということで、日本の国を追われてきた 私たちだったんですけど、この町では、反対に、私たちが、キリスト教を信じているキリシタンだ、ということで、キリスト様を おもてなしするようにして、大歓迎してくださいましたよ。

「国外追放」の命令を受けて、1614 年 11 月 8 日に、長崎を出発。ひと月以上かかって、マニラに到着したのですが、マニラ湾につづいている、パッシグ川ふなつきばの船着場から、上陸いたしました。

総督の ファン・デ・シルバ様をはじめ、市民の皆さまの大歓迎をいただきながら、まず、総督官邸かんていに迎え入れていただきました。

その後、ごえいへい護衛兵付きの、総督様の馬車に乗せていただいて、私たちのためにご準備いただいた宿舎に向かったのですが、途中にあります、マニラ大聖堂（マニラ・カテドラル）と、サン・オーガスチン教会、この2つの教会では、馬車を降りて、祈りをささげさせていただきました。

私たちが、400 年前に祈りをささげました サン・オーガスチン教会は、今も・現在も、当時のままの建物が、ほとんどそのまま残されていて、毎週、今も、礼拝・ミサがささげられているんですよ。

そして、もう一つ。

400 年前に、日本人の人たちが多く住んでおられた場所・今は、パコという駅の前の ディラオ広場が、「ひにち比日友好公園」“フィリピンと日本が仲よくしましょう” という公園になっていて、そこには、高槻しろあとの城跡公園に建てられている 私の像「高山右近像」と同じものが、建てられているんですよ。

高槻市とマニラ市とは、私との関係で、姉妹都市姉妹都市になっているんですよ。

●「うこんさん、うこんさん！ せっかくのマニラだったんですが、長くは、おられなかったんですよネ。」

そうなんです。真冬の金沢を出発したあと、不自由で、きびしい長崎までの旅。

そして、長くて、苦しい、マニラまでの船の旅。

そして、新しい環境・熱帯地方での生活。

私のからだは、限界に来ていたようです。マニラの町に到着して、40 日ほどで、ひどい熱病にかかってしまいました。

私はこの時、63 歳でしたが、思えば、私がこれまで 一緒にさせていただいた方々は、ほとんど先に亡くなられていますから、私は、長生きしてきた方だと思います。

私は、天の御国・パライズに召していただく時が近づいてきていることを感じましたので、私のことを最後まで、よく看病してくれた 妻のジュスタや、娘のルチア、そして 長男・ジョアン十次郎の子ども達（若い 5 人の孫たち）に、別れの言葉・遺言を語りました。

「泣いてはいけません。お前たちにとって、この私が必要なのだとでも、思っているのだとしたら、考え違いに気づきなさい。お前たちのことは、デウス様・神さまが、お引き受けくださるのです。

今まであったことを 考えてみなさい。私たちは、外国に来て、苦しい思いををすると思っていたのに、日本の国にいた時よりも、恵まれ・愛され・栄誉を与えられているではありませんか。

このことは、神さま・デウス様のなさってくださっていることであり、このことは、たとえ私が召されて、亡くなったあとも、続いていき、かえって、増していくことでしょう。

お前たちは、りっぱなキリシタンになって、教会や神父様方の教えにしたがって 歩んでいきなさい。

もし、このことに背くならば、勘当し、私は、あなた方を、子や孫、あるいは親族とは認めません。」

数日して、病気は悪くなっていました。

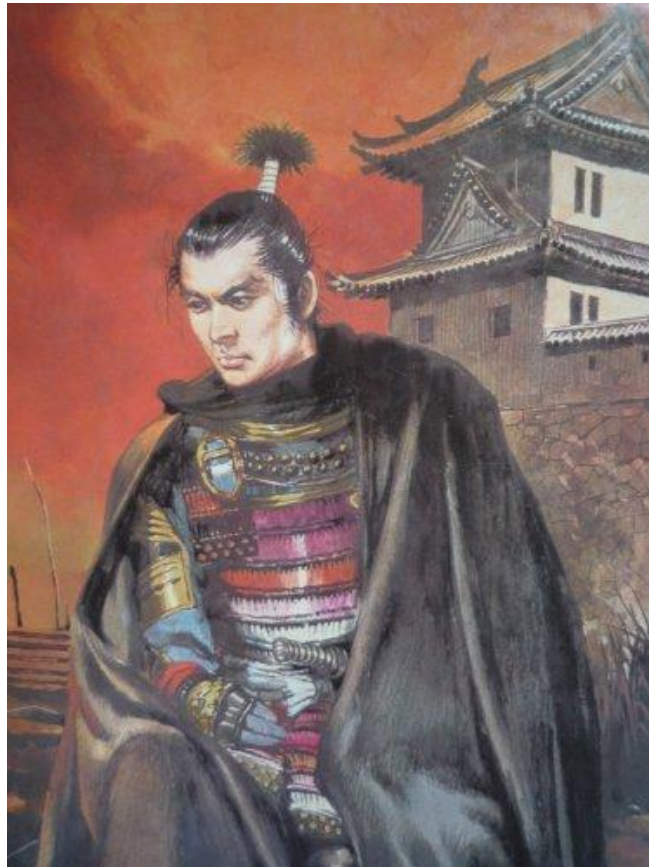
そして、ついに、1615 年の 2 月 3 日。私は、主イエス・キリスト様のお名前をとえながら、祈りながら、静かに、天に召されていったのでした。

63 歳。洗礼を受けてから、50 年の生涯でした。

私の、このような話を、最後まで、熱心にお聞きくださって、ありがとうございました。

天の御国・天のパライズ・天国で、皆さん方全員が お越しになるのを、私たち夫婦・妻のジュスタ、父のダリオ飛騨守、細川ガラシャさん、その他、たくさんのキリシタンの皆さん達と共に、お待ちしております。いつの日になるでしょうか。

その時まで、ごきげんよう。さようなら。



(「高山右近」 柳 柊二・画)